

第一次世界大戦下のイギリスにおける「戦時音楽委員会」の活動とその目的

西 阪 多恵子*

The Activity and Purpose of the Music in War Time Committee in the First World War in Britain

NISHIZAKA Taeko

Abstract

The outbreak of the First World War caused difficulties for people in Britain in many ways. The Music in War Time Committee (MWTC) was the principal organization that made charitable efforts to alleviate both economic hardships for professional musicians and fatigue of the soldiers by employing the former to give the concerts for the latter.

MWTC originally started for the purpose of saving music from the paralysis the war would bring. Soon after its beginning, the first purpose sank under the more urgent one of helping musicians. Then entertaining soldiers with music appeared as a third purpose as much needed as the second one. The first one seemed to have been lost.

Meanwhile, concerts at hospitals and camps offered chances for musicians and soldiers to encounter and interact with each other. MWTC organizers, musicians and soldiers tried to find ways to enjoy music together. Their musical world widened. Far from being paralyzed, music was active. It proved that the first purpose never had been lost. It could be said it was achieved through the harmony of the other two purposes.

Keywords : Music in War Time Committee, First World War, Britain, Charity, Soldiers

はじめに

第一次世界大戦¹下のイギリスでは、戦争の影響で苦境にある人々のために、民間の組織や個人による音楽活動がさかに行われた。その多くは兵士とくに戦傷者の慰安を目的としていたが、また、生徒の減少や失職などにより、困窮した音楽家の援助を目的とするものもあった。さらに、そのいずれかを目的に始め、他との協力等により、この二つの目的を、慰安演奏会のための音楽家の雇用といった形で同時に果たすものも少なくなかった。

本研究の対象である戦時音楽委員会（Music in War Time Committee 以下MWTC）は、この二重の目的をもって活動した最も主要な組織の一つである。だが、その発端の目的は、兵士や音楽家のためではなく、音楽のため、音楽活動が進むように、音楽を助けるためであった。しかし、まもなく音楽家を助けるという差し迫った必要が目的と化し、さらに、この新たな目的に、兵士への音楽の提供という目的が加わった。MWTCは、戦後1920年5月の6785回目の演奏会まで、約4年8カ月に及ぶ活動の大部分でこの二重の目的を果たしていった。

しかし、MWTCの発端の目的は、失われたのではなく、後に浮上した二重の目的を通じて事実上遂行された。

キーワード：戦時音楽委員会、第一次世界大戦、イギリス、チャリティ、兵士

*平成27年度 比較社会文化学専攻修了 基幹研究院研究員

本稿は、主に活動の中枢にあった委員アネット・ハラア Annette Hullahによる記録に基づいて、その過程を明らかにし、演奏会という二重の目的の遂行の場における兵士と音楽家の関係を考察する。それらをふまえ、音楽を助けるという目的の遂行が人々と音楽にもたらした変化をとらえ、提示することを本稿の目的とする。

先行研究および主要使用資料について

MWTC関連の先行研究としては、Angell 2014が、大戦中の音楽をめぐる言説を当時の音楽雑誌等の報道記事に基づいて包括的に論じており、MWTCについては音楽とチャリティとの関係で取り上げている。Hirshfield 1992は戦時下の人々のための主な活動母体について概観している。その他、戦時下のチャリティや音楽状況あるいは音楽家研究において、MWTCや同種の活動への言及がみられる²。

戦時下の音楽状況に関するおよその共通理解として、戦時下に音楽の価値についての一般の認識が高まったことや、音楽のエリートと大衆、高級文化と大衆文化のような諸境界が一時的にせよ浸透性あるものになった (Angell 2014: 258-59) ことが挙げられよう。本稿は、当時の人々に極力視点を合わせて当事者の記録を検討することにより、そうした状況をもたらす人々の言動の変化を具体的に示し、MWTCの活動が果たした音楽文化上の役割を示唆するものともなろう。

本研究の主要資料であるハラアの「MWTCの記録1914-1920」Record of the Music in War Time Committee 1914-1920 (Hullah 1920) は、末尾に1920年7月と記載された37頁のタイプ原稿であり、ロンドンの帝国戦争博物館にマイクロフィルム版で所蔵されている³。章節区分はない。概ね設立から解散までの時系列に沿っているが、必ずしも年代を特定していない。その補いともなった他の主要資料は『ミュージカル・タイムズ *Musical Times*』をはじめ、当時の音楽雑誌記事である。それらはMWTCや同種の活動に対する音楽界の高い関心を反映する点においても重要な史料と思われる。

本稿の構成は次の通りである。1. ではMWTCと同種の他の主な活動母体に関して述べ、2. 以下はMWTCに関して2. で発足の経緯と趣旨、3. 及び4. で音楽家と兵士それぞれのための活動について述べる。5. では、兵士のための演奏会の音楽、及び、音楽家、兵士、MWTC三者の関係、さらに、最初の目的と二重の目的との関係を考察し、本稿の結論を提示する。

1. 戦時下の人々のための主な音楽活動

兵士と音楽家両方のための活動母体の中でも、規模の大きさと頻繁な報道でとくに際立つのは、個人では、開戦後数ヶ月のうちに200以上の演奏会を病院や作業所で行った歌手クララ・バット Clara Butt、組織ではMWTCに次いで「戦時緊急エンターテインメント War Emergency Entertainment」であろう。戦時緊急エンターテインメントは、富裕層の女性たちによって、1914年10月に発足した組織である。その後、イギリス室内楽作品の推進という第三の目的が同組織のいわば看板となり、統括者である作曲家・歌手のインドア・ド・ラーラ Isidore de Laraの名と共に、「戦時緊急演奏会」として知られた。

但し、同組織の演奏会は、その半数近くが軍病院で行われていた。兵営等でのチャリティ演奏会も多い⁴。イギリス音楽を推進する組織として音楽雑誌で精彩を放つ一方、一般紙上の募金広告では「負傷者のための演奏会」との見出しが目を引く⁵。イギリス音楽推進に愛国的な面があるとしても、それ以上に人々の共感を誘うのは、戦傷兵士のために行うということであった。また、彼らの心身の回復は、軍部にとっても急務であった。同組織もその状況に適う成果を上げていたといえる。

兵士のための活動としては、Y.M.C.A. 関係の音楽企画が一層顕著である。俳優・舞台監督・歌手のレナ・アッシュウェル Lena Ashwellは、Y.M.C.A. 女性補助部隊との関係で国内外の兵営や病院に毎月数人の歌い手や芸人からなる演奏団を送り出し、1917年秋までに5000回近い演奏会を実施した (Anon.1917b: 517)。また、成人の音楽教育に熱心な音楽学者パーシー・スコールズ Percy Scholesによって、兵士自身が歌や演奏を楽しむための援助を目的にY.M.C.A. 音楽部門が発足した。戦場に楽器や楽譜を送り、指導者や演奏家を派遣するための募金広告は、「音楽、英雄を癒す者」と題し「自ら戦えない者は戦う者を助けることがベストであり、音楽家が役立つ最高の機会」(Y.M.C.A. 1918: 149) と訴えた。

こうした活動の多くは、苦境にある人々を救済するチャリティとして始まった。戦中のチャリティの盛り上がりは、無償奉仕を求められる音楽家の困窮に拍車をかけ、その救済が必要となるほど著しかった⁶。しかしながら、MWTCはまず、音楽家や兵士ではなく、音楽を救済するために出発した。以下にその経緯と趣旨、活動について順次述べていく。

2. MWTC発足の趣旨

MWTCは1914年9月、音楽批評家ヘンリー・コルズHenry Collesの友人4名への呼びかけに始まった。作曲家や批評家など集まった音楽仲間は役割分担し、5名からなる暫定委員会⁷を設けた。MWTC発行の案内状には、賛同者として主要音楽学校の校長などの名が挙げられ⁸、その趣旨と計画が次のように記されている(Anon. 1914a: 646)。

戦争のために多くの組織が活動を休止している。この状況では、音楽家に経済的困窮をもたらすだけでなく、人間性を豊かにする影響が失われるに違いない。平和時に音楽が必要なら、戦時にはなお一層必要である。問題は「戦争が続く間、我国で音楽活動はどのようにその道を進んでいけるのか」ということである。

その解決の方法として、次の4つの事項を計画している。1. 仕事を必要とし、MWTCあるいは雇用組織からの報酬を望む有能な音楽家(歌手、器楽奏者)の登録簿作成。2. 地域の音楽組織との協力、3. そうした組織のない地域における演奏会実施の準備、4. 諸組織による兵士や避難民向けの無料演奏会への協力。

これらの実施のために、戦争による生活難に陥っていない音楽家(プロとアマチュア共)に、以下の協力を求める。寄付金等の費用面のほか、中央組織の援助、地域の音楽関係企画の実施、マドリガルや四重奏などの指導、プログラムの作成など。

このように、発足当時、音楽家と兵士は、「目的」ではなく「方法」の中で言及されている。MWTCの目的は、音楽活動が途絶えず、その道を進んでいけるようにすることであった。「MWTCはまず、戦争が姉妹芸術にもたらしたマヒ状態から音楽を救い、必要なときに供することができるようにしておくために結成された……いわば歌の護り手になろうとの計画が進展した」(Hullah 1920: 1)⁹。

3. 音楽、音楽家

3-1 音楽と音楽家

MWTC発足の知らせに、さまざまな情報や寄付金が寄せられた。だが、それに増す勢いで援助を求める音楽家が押し寄せ、登録簿の作成は担当者ヴォーン＝ウィリアムズ一人の手に負えなくなった。そこで、委員長パリーHubert Parryの忠告で「委員会に現実性が持ち込まれ、積極的で実際的な女性メアリー・パジェットMary Pagetとアネット・ハラーが加わった¹⁰」(Colles 1942: 107)。コルズを含む4人は連日オーディションに追われた¹¹。

MWTCの書記・会計担当者コベットによれば、音楽家の雇用は、音楽家と音楽に役立つようにとの願いからであってチャリティではない(Anon. 1914b: 659)。コベットはまた「音楽が生きるためには音楽家が生きなければならぬ」(Colles [et al] 1915: 10)と述べた。音楽家は音楽のための存在なのである。だが、理屈はどうあれ、「音楽を助けるという最初の目的は、3週間で、音楽家を助けるという一層緊急の目的の下に沈んだ」(: 3)。

MWTCは、音楽のために「有能な音楽家」を求めていた。だが、「より優れた音楽家のために資金をとっておこうとしたが、援助が本当に必要な者を単に拒絶するわけにいかなかった」(: 5)。応募者の9割には、音楽以外で適当な働き口に連絡がとれるよう計らった¹²。仕事の配分は、専ら音楽によって生計をたてる優秀な音楽家を第一に、経済状況による優先順としていたが、音楽の水準を保つため、収入に関わらず、才能のゆえに優先する場合もあった。また、聴衆の要求度によってさまざまなレベルの音楽家に場を提供する半面、仕事が満足にできない者は登録簿から削除した(: 8-9)。MWTCは、音楽の範囲を越えて生活援助もしつつ、音楽の水準の維持にも努めていたのである¹³。

3-2 音楽家の援助、専門職者救済の目的

1915年1月、MWTCは専門職階級救済評議会 Professional Classes War Relief Council (以下PCWRC) の誘いを受け、その音楽部門として加わった。PCWRCは戦争のために困窮した専門職者に対し、既存の諸組織との協力による集中型の援助を目的として開戦後まもなく創設された組織である (Anon. 1915a: 341)。

PCWRCへの加入によって、音楽家の救済はMWTCの明確な目的となった。だがそれは、弱者救済のチャリティではない。PCWRCの目的は、戦後も自国の水準を維持することにあった。そのためには、戦力や財政のみならず、国の繁栄を造るものすべての保持に必要な能力を持つ人々、すなわち専門職者階級の維持が重要である (Anon. 1916a: 421; Anon. 1918a)。その意味では、PCWRCが本人及び妻の出産費用や子の学費、さらに年長の子には就職活動に適した服装のための費用をも援助した (Anon. 1916a: 422-23) ことは、理に適うだろう。MWTCの音楽家援助が国の音楽活動のためであるように、PCWRCの専門職者援助は国の繁栄のためである。この点でMWTCはその上部組織であるPCWRCと相似形をなしていた。

4. 新しい聴衆

4-1 兵士のための演奏会

一方、兵士への音楽の提供は、当初2カ月程はMWTCの目的と考えられなかったようだ。コルズは11月の音楽協会例会で、兵営での演奏会は単に音楽家の雇用のためという考えを表した。「そうした演奏会は一時凌ぎの手段にすぎない。音楽家は戦時の薄給に甘んじねばならず……あまり価値のない音楽が演奏されるかもしれない」(Colles [et al] 1915:7)。

コルズと対照的に、ハラーとパジェットはMWTCに加わる以前から、人々の慰安や娯楽としての音楽活動に関心をよせていた。ハラーは、兵士に気晴らしを供したいと考え、パジェットは工場の女性労働者や出征兵士の母や妻のための催しに関わっていた (: 3)。彼女たちが1914年11月以来、演奏会の企画構成を担った。

当初、兵営や軍病院では、民間人による兵士向けの演奏会上官たちは警戒し、女々しい、感傷的、と反対する者もいた (: 4)。しかし、演奏会の成功が続くと、彼らも兵士たちの間で音楽が占める位置に気づくようになった。楽団の編成は大抵、ピアニストかヴァイオリニスト、またはチェリストが1人と歌手2人、そして欠かせないのが“お笑い”あるいは手品師か腹話術師である (: 15)。そうした一行による演奏会が医療的効果をもたらすと報告もなされた。Y.M.C.Aやイギリス赤十字社との連携は、その認識を広める契機となったようだ。

1915年3月、フランス駐屯イギリス軍向けのハラーの計画による演奏会がアシュウェル指揮の下にY.M.C.Aによって実施された。その報告によれば、演奏会は兵士たちに「薬よりも良い母国の贈り物」と喜ばれ、医者も「戦争に乱された患者の心にとって、薬にまさる」と歓迎した (Reznick 2004: 86)。MWTCも翌1916年秋に、国内で同様に好意的な反応を得た。赤十字基金からの補助金による、イングランドとウェールズ全域にわたる病院演奏会ツアーの後、司令官や兵士から感謝の礼状が続々と届いた (Anon. 1917a: 372)。シェルショックで失語状態に陥った兵士が歌うことから言葉を取り戻したとの報告もある。ある司令官は、演奏会は患者を病棟の雰囲気から解放し、入院日数を平均5日短縮するほどの医療効果をもたらす、とハラー宛に書いた (: 14)。兵士のための音楽は、慰安と娯楽、ときには医療効果さえ生ずるとして、受け入れられたのである。

4-2 銃後の人々

MWTCは、兵営や軍病院の他、軍需工場やクラブ、学校などにも演奏団や音楽講師を送った。どこでも歓迎され、再来の依頼に応えきれないほどであった (Anon. 1915c: 393)。工場長は、演奏会の日には作業員が不平をいわずに働き、作業効率が上がると喜んだ。出征兵士の妻のクラブでは、夫ほどミュージック・ホールに行き慣れていない妻たちにとって、演奏のよしあしはどうかあれ、演奏者が親切で音楽がわかりやすければ十分であった (: 17-18)。

MWTCはまた、主に募金を目的とする公開演奏会も若干行った。そのやや特殊な形として、ランチアワーコンサートがある。音楽家の雇用と人々への娯楽の提供、そして多少の活動資金の補いをも狙いとする公開演奏会である。入場料は1.5ないし3ペンス程、40分ないし1時間の短時間に盛り沢山のプログラムでユーモアの要素もある。その模様から演奏会の新たな聴衆が生まれた様子が浮かび上がる。

やって来るのは、昼休みの事務員やビジネスマン、タイピスト、俗にフラッパーといわれた今風の若い女性たちなど、さまざまであった。「最初は落ち着かず、サンドイッチやチョコレートをはおぼっていた聴衆はすぐに静かに聴くようになった。演奏会の質が知られるようになると音楽に明るい人々も常連となった」(：26-27)。

1916年にマンチェスターとリーズにMWTCの支部が設立されており、ランチアワーコンサートはロンドンの数か所で行われた他、とくにマンチェスターでさかんであった。マンチェスター支部によれば、ランチアワーコンサートは、市の立つむしろ人々の忙しい日に行きやすいよう時間と場所を設定してプログラムを組むと最も成功するという(Anon. 1916b: 213)。戦時下の困難の中でわずかな時間に音楽を聴きに来る人々の姿が彷彿しよう。

ランチアワーコンサートや兵営あるいは病院の演奏会の聴衆には、それまで演奏会に行ったことのない者もいただろう。とくに、兵営や病院では、その場から逃れられず、仕方なく聴き手となる者も少なくなかったであろう。次節では、その場でどのような音楽が演奏されたのか、兵士向けの演奏会を中心に検討する。

5. 二つの目的の調和一音楽家、兵士、MWTC

5-1 MWTC及び音楽家の「良い音楽」と兵士

当時、兵士の間では、マーチ風の《遙かなティペラリー》や郷愁をそそる《ピカルディのバラ》などの歌に人気があったが、MWTCの方向性としては、いわゆるクラシック音楽主体の曲目構成を目標としていたようだ。もっとも、演奏会の膨大な数や、当初は俗悪なものがよいと勘違いしている歌手もいたという記述(：11)から推察すると、曲目の選択は、演奏する音楽家に任された面が大きかったと思われる。

「新しい音楽は兵士に人気がないという思い込みから、最初は同じ歌が何度も登場したが……この場を我国の音楽の地平を広げる機会と心得る優れた音楽家の助力によって、娯楽の水準は程なく向上した」(：15-16. 下線は引用者)。Hullah 1920はここで、メンデルスゾーン《ヴァイオリン協奏曲》が軍病院の聴衆すべての心をつかんだという軍当局の書簡を引用している。この文脈では、「娯楽の水準」とは、クラシック音楽への関心や理解度を示すと考えられよう。また、「優れた音楽家の助力」とは、兵士へのクラシック音楽の提供によって、我国の音楽水準の向上に貢献する音楽家の働きを意味しよう。ここにはまた、「優れた音楽家」はMWTCと同様の音楽観と使命感を持つという前提がうかがえる。そうした音楽観は、当時、^{グッド・ミュージック}良い音楽という言葉がしばしばクラシック音楽一般を指した(Angell 2014: 23)ことが象徴するように、ほぼ自明であった。

しかし、それは不変ではない。次の箇所での^{グッド・ミュージック}良い音楽はクラシック音楽とは限らないだろう。

二つの目的の調和という幸せな偶然は兵士と音楽家双方の幸福と慰めとなった。これがなければ、兵士にとって演奏会は僅かな貧弱なものしかなく、音楽家に聴衆はほとんどいなかっただろう。兵士は、^{グッド・ミュージック}良い音楽の影響、すなわち万人の安らぎと楽しみであり、ある者には心身の快復になるという影響を失ただろう(：34-35)。

ここでの^{グッド・ミュージック}良い音楽とは、兵士の心身に直接良い影響を及ぼす音楽であり、したがって兵士あるいは万人の立場から「良い」と受け止められる音楽を指すと考えられよう。その場合の良い音楽とは何かについて、MWTCの活動を伝える『タイムズ』は次のように示唆している。「聴き手が区別するのは“クラシック”か“ポピュラー”かではない。長すぎず、完璧に演奏されるか否かである」(Anon. 1918b)。

実際、演奏会の曲目は基本的に、馴染みやすいクラシックとポピュラー風のものの混合であったようだ。兵士も合唱を楽しむように計画されたある演奏会では、英仏露の国歌やサリヴァンのオペラ《軍艦ピナフォア》中の《警官の歌》に始まり、「演奏者と聴衆の区別がほとんどなく、楽しく歌う会になった」(Anon. 1915b: 105)。また、あるランチアワーコンサート¹⁴は、1時間のプログラムで、4曲のピアノ三重奏曲(ドヴォルザーク《スラヴ舞曲》、トセッリ《セレナータ》、ブラームス《ハンガリー舞曲》、ハイドン《ロンド》)の間を、歌曲4曲(ムソルグスキー《蚤の歌》、サンダーソン《愛しの人》《デヴォンシャーのクリームとりんご酒》、ブラーエ《不在の祈り》¹⁵)がつなぎ、イギリス国歌《国王陛下万歳》で締めくくる。その間にエンターテイナーの語り¹⁶が2度入る。プログラムには、翌週の演奏会の予告として、5人の出演者の役割がそれぞれ、テノール、口笛吹き、コルネッ

ト、エンターテイナー、及びピアノ、と記され、兵営や病院での演奏会と似通った編成を示している。こうした曲目構成や楽器編成による演奏会が、兵士をはじめいわゆる音楽愛好家ではない聴衆に向けて多数行われたのである¹⁶。次節ではそうした演奏会における兵士と音楽家、及びMWTCの関係について考察し、最後に、音楽を助けるという最初の目的との関連から本稿の結論を導くこととする。

5-2 音楽家-兵士-MWTC

兵士にとって重要なことは、クラシックかポピュラーかではなく、どのように演奏されるかである。その結果は彼らの行動に現れた。

「兵士はどのような音楽でも上手に心をこめて演奏されればうけいれ、あやふやならたちまち注意散漫になった。病院の兵士は礼儀正しいが、兵営の兵士は容赦なく意見し、下手な奏者は直ちに思い知らされた」(：15)¹⁷。

Hullah 1920には、そのような場合の音楽家の言動についての言及はなく、音楽家の声としては、MWTCとの雇用契約で家族も助かったという書簡が引用されている程度である(：34)。だが、音楽家にとってMWTCの演奏会は、単なる経済的な必要手段として終わらなかったのではなかろうか。そこに兵士たち聴き手がいたからである。

MWTCの演奏会も音楽家も数多く¹⁸、現場の状況は一概に推測しえないが、おそらく音楽家の多くは、主に音楽仲間や愛好家、生徒やその親の間に音楽に関わってきたのではなかろうか。そしてこうした演奏会でそれまで出会わなかったタイプの聴衆と出会ったのではなかろうか。多くの兵士も馴染みのないタイプの音楽と人々に出会っただろう。

その意味で、前節の引用で「幸せな偶然」とされる二つの目的の調和とは、単に、一方で音楽家が金銭を得、他方で兵士が音楽を聴くことではなく、双方が音楽の時と場を共有し、試行錯誤で相互に働きかけていくことであったのではなかろうか。演奏会は、平和時には良い音楽と無縁だったかもしれない兵士と、良い音楽と音楽“通”にのみ目を向けていた音楽家とが、互いに求める音楽を探って働きかけあう場であり、二つの目的が調和する場となったのではなかろうか。

相互の働きかけは、現場の演奏者と聴衆の間だけではなく、直接間接にMWTCにも及んだと思われる。前述のように、発足当初、コルズは、兵営での演奏会は音楽家の一時凌ぎと言ひ、コベットは、音楽家は音楽が生きるために生きなければと言った。当時彼らはおそらく、MWTCによる音楽の現場の多くが、軍服姿の聴衆と混合的な曲目構成の演奏会になるうとは予想しなかつただろう。だが、彼らも活動を通じてそうした演奏会に意義をみいだした形跡がうかがえる。

コベットは、あるランチアワーコンサートを訪れ、音楽“通”には物足りない演奏会を人々が心から楽しんでいるようすに深い感銘を受けた。彼はそこで、弦楽四重奏による《ロンドンデリーの歌》や民謡風の小曲の演奏が、聴衆にとってクラシックの室内楽への導入となっていることを実感したのである(Cobbett 1918: 276)。

コベットはまた、MWTC解散後の総括的報告(Cobbett 1920: 30)において、MWTCの発足に関して、目的には触れず、演奏会の膨大な数に示された成果を強調し、とりわけ兵士と音楽家のために数多くの演奏会の責任を負ったハラーとパジェットの功績を称えた。一方、コルズは後に、MWTCの発足は、軍隊への物質的支援に音楽での支援を加えるためであったと述べている(Colles 1942: 106)¹⁹。こうしたことから、MWTCの活動を経て、彼らの視野に、多くの兵士をはじめ良い音楽にさして関心のない人々が聴衆として入ってきたと考えられよう。それは発足の記憶を書きかえるほど大きかったのかもしれない。

このようにみると、音楽家と兵士が対峙した演奏会は、MWTCも直接間接に加わった三者間の働きかけの場であり、また、MWTC設立当初の案内状に挙げられた「音楽活動はどのようにその道を進んでいけるのか」という問題を、共有する場であったといえるのではなかろうか。問いを共有しつつ、音楽活動が進み、音楽を助けるという目的が遂行されていったのではなかろうか。

結び

音楽活動が進むように音楽を助ける、という最初の目的は、音楽家に仕事を、兵士に音楽を提供するという二つの目的の調和を通じて遂行された。音楽家、兵士、MWTCの三者間の働きかけは、異なる背景を持つ者同士が互いを知り、それぞれの音楽世界を広げ重ね合わせる機会であったといえよう。その意味では、音楽は人々のためであり、音楽を助けるとは、結局は人々を助けることであったともいえる。しかし、それだけではない。音楽も助けられた。但し、おそらく当初MWTCが主眼としたタイプの音楽の維持ではなく、より広い層の人々を介して、音楽活動は進んでいた。「音楽が生きるためには音楽家が生きなければならない」という文言の「音楽家」を広く「人々」と言いかえると、MWTCの活動はその証しとなろう。音楽は人々を助け、人々が音楽を生かし、助けたのである。

【参考史料コレクション】

The Imperial War Museum [IWM] Women at Work Collection. Benevolent Organisations. (microfilm) B.O. 7: Music. 2. Music in War Time Committee (B.O. 7/2); 3. War Emergency Entertainment (B.O. 7/3)

【参考・引用文献】 *MT = Musical Times*

ANGELL, Jane Anne Sarah. 2014. *Art Music in English Public Discourse during the First World War*. Dissertation, Royal Holloway University of London.

Anonym

1914a. "The Outlook for British Musicians", *MT* 55 (1914.11): 645-46.

1914b. "The Position of British Musicians: Meeting at Queen's Hall", *MT* 55 (1914.11): 657-59.

1915a. "The Professional Classes War Relief Council", *British Medical Journal* 1 (1915.2.20): 341.

1915b. "The Music in War Time Committee", *MT* 56 (1915.2): 104-05.

1915c. "The Musical Profession and the War: an Appeal", *MT* 56 (1915.7): 393-94.

1916a. "Professional Classes in War Time", KINLOCK-COOKE, Clement (ed.), *The Empire Review and Journal of British Trade* 29, London: Macmillan. (<http://www.mocavo.com/The-Commonwealth-Empire-Review-Volume-29/371086/435#7> 2014年1月13日アクセス)

1916b. "Music in the Provinces", *MT* 57 (1916.4): 212-13.

1917a. "The Music in War-Time Committee: Hospital Concerts", *MT* 58 (1917.8): 372.

1917b. "Music in the Provinces", *MT* 58 (1917.11): 515-20.

1918a. "Professional Classes War Relief Council", *The Sydney Morning Herald*, 1918.1.30.

(Trove. <http://trove.nla.gov.au/ndp/del/article/15764202> 2017年7月14日アクセス)

1918b. "Musical Centres in War Time and After", *The Times* 1918.11.23.

1920. "A War-Time Echo", *Musical News* 59: 185-86.

COBBETT, Walter Willson. 1918. "Chamber Music Notes", *The Music Student* 10/7: 275-76.

— 1920. "Music in War Time: A Brief Record of Work Accomplished", *The Music Student* 13/1: 30.

COLLES, H.C. 1942. *Walford Davies: A Biography*, London: Oxford University Press.

COLLES, H.C. [et al] 1915. "Music in War-Time", *Proceedings of the Musical Association* 41: 1-15.

HIRSCHFIELD, Clair. 1992. "Musical Performance in Wartime: 1914-1918", *The Music Review* 53/4: 291-304.

HULLAH, Annette. 1920. "Record of the Music in War Time Committee 1914-1920." IWM. B.O. 7/2

REZNICK, Jeffrey S. 2004. *Healing the Nation: Soldiers and the Culture of Caregiving in Britain during the Great War*, Manchester: Manchester University Press.

RONALD, Landon. 1914. "The Question of Charity Concerts", *MT* 55 (1914.10): 611-12.

Y.M.C.A. 1918. "Music, the Healer of Heroes" *MT* 59 (1918.4): 149.

【註】

- 1 1914年6月サラエヴォ事件に端を発し1918年11月まで続いた。イギリスは1914年8月4日にドイツへの宣戦布告により参戦。本稿で「大戦」「戦争」はこの戦争を、「戦時下」は大戦中のイギリスの状況を指す。
- 2 例えばReznick 2004: 86-87, E.D. Mackerness, *A Social History of English Music*, London: Routledge and K. Paul, 1964: 237-9, L.J.Collins, *Theatre at War, 1914-18*, Basingstoke: Macmillan Press, 1998: 253等。
- 3 帝国戦争博物館 Imperial War Museum (IWM) 所蔵のマイクロフィルム版「女性の働きコレクション。慈善組織。7 音楽」には、冒頭にハラーによる総説Music in War Time: an account by Miss Annette Hullah (B.O. 7/ 1) がおかれ、以下B.O. 7/2から、B.O. 7/12まで活動母体毎に報告書や書簡、プログラム等の関連資料が収められている。MWTCについてはB. O. 7/ 2に、Hullah 1920の他、演奏会プログラム約20点、募金広告のチラシ、経過報告など数点がある。
- 4 ラーラの弟で俳優のFrederic Laraからハラー宛書簡(1919.11.11)によれば、演奏会は全1311回。内訳は、病院で591、全イギリス作品演奏会166、兵営等でのチャリティ演奏会153、募金目的の演奏会129等。同書簡はまた、同組織の発足は、音楽家や俳優への仕事の供給が目的であったとしている(IWM.B.O. 7/3)
- 5 “Concerts for the Wounded: Mr. Isidore de Lara’s Appeal”, *Daily Telegraph* 1915.4.9 (IWM. B.O. 7/3)
- 6 Ronald 1914は、音楽家は概して富裕ではない、と述べてこの風潮を強く批判した。
- 7 暫定委員はコルズ、ウォルフオード・.デイヴィスWalford Davies, A.H.フォックス=ストラングウェイズA.H. Fox-Strangways、レイフ・ヴォーン=ウィリアムズRalph Vaughan Williams, W.W.コベットWalter Willson Cobbett。
- 8 アレクサンダー・マッケンジーAlexander C. Mackenzie (ロイヤル音楽アカデミー)、ヒューバート・パリーHubert H. Parry (ロイヤル音楽カレッジ)、フレデリック・ブリッジFrederick Bridge (トリニティ音楽カレッジ)、ランドン・ロナルドLandon Ronald (ギルドホール音楽学校)、グランヴィユ・バントックGranville Bantock (バーミンガム・アンド・ミッドランド・インスティテュート)。
- 9 以下、Hullah 1920からの引用については著者名と年次を省略し、頁数のみ記す。なお、Hullah 1920は*Musical News* No.1482-1486 (1920.8.21-9.18)に掲載されたが、筆者は一部未見である。
- 10 ハラーはMWTC入会以前に女性芸術家非常雇用局で音楽部門を設立した。ピアニストのレシェティツキの生徒で彼の伝記や音楽入門書の同名著者と同一人物ともいわれる。パジェットはアマチュア音楽家。1916年音楽協会例会で発表を行った。
- 11 ヴォーン=ウィリアムズとコルズはその後従軍し、ハラーとパジェットが活動の中心となった。
- 12 「音楽より適した職業a more suitable occupation than music」(: 8)に仕向けたことについて、*Musical News* は、MWTCが応募者の9割については国にとってより重要な戦時の仕事ができると考えて断り、健康な男性を入隊に、それ以外は何らかの軍需作業に仕向けたとして、MWTCが新兵募集にも貢献したと述べている(Anon.1920: 185-86)。
- 13 MWTCは、曲目と演奏レベルについて、定めた基準を遵守した(Anon. 1918b)。具体的な基準については不詳。
- 14 1920年4月20日午後1時～2時、ロンドンのウェストミンスターホールにおける演奏会プログラム(IWM. B.O. 7/2)
- 15 サンダーソンWilfred SandersonとブラーエMay Brahelはそれぞれイギリスとオーストラリアの現代作曲家。
- 16 1914年9月から1920年5月(公式解散は4月末)まで、演奏会は6875回。その内、PCWRCの一部門として1915年1月から1919年8月まで4690回(病院2537、兵営750、学校128、軍需作業所504、ランチアワー192、その他579)。経費総額は音楽家の家庭約200件への援助や教育費用も含めて27,537ポンド(: 35-37)。
- 17 軍病院では、MWTCやYMCAの報告と裏腹に、演奏会自体に全く無関心な兵士も多かったようだ。戦争後半には、兵役を免れている音楽家に対する反感から粗暴にふるまう兵士も増えた(Reznick 2004: 86-87)。但し、MWTCは徴兵制導入(1916年1月)以前に、兵役逃れの応募者に警戒し、戦争奉仕はすべての者に不可欠というチラシを作成している(: 10)。また、徴兵制下において、兵役免除申請が認められる可能性はごく限られていた。実際に兵役逃れでMWTCに雇用される余地はほとんどなかったであろう。
- 18 音楽家の総登録数はHullah 1920に記載されていないが、1914年末までにすでに146人が52の演奏会に雇用されている(Anon. 1915b: 104)ことから、最終的にはかなりの数に上ると推測される。
- 19 出典の伝記の主題であるデイヴィスは、MWTC創設時の委員。後にMWTCを去り、結成した合唱隊で兵営や病院で演奏会を実施した。コルズは、ハラーやパジェットなどMWTC委員の働きや、Y.M.C.A.の兵士のための音楽活動についても共感をもって記述している(Colles 1942: 106-09)。